

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、

そしてわたしについて来なさい。」(マルコ 8 : 34)

「わたし」とは誰でしょう？それは私達の罪をその身に負い、身代わりに十字架で罰を受けて死んでくださり、3日目に復活して信じる者の心に聖霊として働いてくださるお方。私達を愛し、神の子としてくださり、永遠の命を下された神様。日々み言葉を持って行くべき道を示し、天国への道となってくださったイエス・キリストです。

佐賀の唐津、山本村で神を選んだルドビゴ茨木少年。「自分の養子になれ。あと 50 年は生きられるぞ。おいしい物も食べられる。きれいな服も着られる。その上、刀を差して武士になり、大名にもなれるぞ。」処刑執行責任者である寺沢半三郎はルドビゴを何とかして助けたくてこのように誘いました。しかし、ルドビゴははっきり「キリストを捨て、永遠の命をつかの間の命と代えることはできません。」と断ります。中略 この 12 才のいたいけな少年にとって、これから十字架にかけられて殺されることは、悲しみでも苦しみでも恐怖でもなかったのです。彼には死への恐怖も、十字架で受ける苦しみや侮蔑への恐れも、全くありませんでした。この少年に息づいていたのは、キリストとともに生き、キリストのために死ぬことのできる喜びだったのです。彼は、パラダイスに、つまり主とともに永遠に生きることの出来る天国に、行くことが出来ることを、確信していました。～むしろ、キリストがかけられた十字架、その同じ十字架にかけられて殉教できることは、この上もない喜びであったことでしょう。ルドビゴ少年をはじめ、26 人の殉教者たちはイエス様の十字架の愛と恵みを知っていたのです。復活の希望とともに。

そして、その十字架の上で、ルドビゴ少年は、神さまへの賛美をささげました。彼の横で同じように十字架にかけられていた 13 才の少年アントニオとともに。「子らよ。主をほめたたえまつれ。」(新改訳聖書では、「主のしもべたちよ。」となっています。)この詩篇 113 篇を賛美しながら、彼らは天に喜んで帰っていったのです。・・・中略 まだイエス様を信じていない両親が、「十字架から降りてきて」と絶叫した時に、「喜んでください」と言ったのです。パウロ三木は十字架の上で、最後まで天国の希望とキリストの十字架による赦しを語り続けていました。悲惨な処刑場が、少年たちの銀の鈴のような声に合わせてやがて大合唱となり、天国がそこには降りてきていました。・・・「殉教」イザヤ木原牧師著 P. 42、43 より

私達の捧げる賛美は、たとえ悲惨な絶望の中でも天国への希望を与える力です。「**あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。**」詩篇 22 : 3

TLCCC FRH

天に登録されている長子たちの教会

Church of the **Firstborn** who are **Registered in Heaven**

主任牧師:イエス・キリスト

ノア勝裕&和子



Siloam

2017 年 2 月 5 日 No.931

(シロアム:遣わされた者 ヨハネ 9 : 7)

新年度の御言葉 「それと同じように、信仰も、

もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」ヤコブ 2 : 17



人若しわれに従はんと欲せば 己を捨て

十字架をとりて我に従ふべし マルコ伝 8 : 34

主の十字架クリスチャンセンター The **Lord's Cross Christian Center**

<http://tlccfrh.astone-blog.jp/>